



日本記者クラブ会報

公益社団法人 日本記者クラブ 〒100-0011 東京都千代田区内幸町2-2-1 日本プレスセンタービル TEL. 03-3503-2722 <http://www.jnpc.or.jp/>



安倍・トランプ会談

トランプ次期米大統領が“差し”で話した最初のリーダーとなった安倍首相。トランプタワーで行われた注目の初顔合わせを、街頭テレビも伝えた=11月18日、東京・有楽町

撮影：遠藤 弘太（共同通信社写真部）

「激動の起点」になった1年
トランプ報道、メディアの正念場

今年は激動の1年、いや、「激動の起点」となる1年と言った方が正確かもしれない。とりわけ「ベールの壁崩壊以来の重大事件」といわれる不動産王トランプ氏の米大統領選当選は世界的な衝撃を与えた。

日本記者クラブで春から始めた米大統領選に向けたシリーズ会見では、「白人中間層の急激な没落が波乱要因」「民主、共和の両党の支持層の大幅な入れ替えが進行中」など専門家諸氏による注意信号が点滅していたが、さすがにトランプ勝利を断言した人はいなかった。お膝元の米国でも有力100紙のうちクリントン支持は52紙、これに対しトランプ支持はわずか2紙だけ。米国メディアですら予測を外した。冷静な観察者であるべきメディアが、「見たいものだけしか見なかった」のかもしれない。他人事ではない。

世界の行方を左右する米新政権がどこに向かうのか、おそらく当選者本人もはっきりとはわかっていないのではない。

不安が世界を覆っているが、ある意味、こうした状況はジャーナリズムにとって信頼回復の好機であり、腕の見せどころともいえる。当クラブも、トランプ新政権の企画をスタートさせる。「見たくないもの」から目を背けず、先の見えない時代に挑戦していきたい。

みなさま、良いお年を！

（土生修一）

ジャーナリズムの原点見つめ

明日のメディアに備えた1年

企画委員長 西村 陽一



日本記者クラブは、そんな今年も多くの情報と視点を発信した。記者会見129回、国内外の取材団派遣11回を含

現代世界について、エマニエル・トッド氏は「産業革命期よりもはるかに重要な転換期を迎えた」と述べ、ヘンリー・キッシンジャー氏はウエストファリア条約以来の激動期に入ったとの考えを示している。2人の知の巨人が語る世界秩序の変容期に、私たちが目撃したのは、トランプ米大統領の誕生であり、英国のEU離脱だった。

昨年がテロに揺さぶられた1年だったとするならば、今年は、これまでグローバルズムを引っ張ってきたアングロサクソンの2大国が世界秩序を揺さぶった年として、人々の記憶に刻まれるだろう。

む会見や行事の合計は、本稿執筆時の11月末現在で240回を数えている。

米大統領選については2月から「変わるアメリカ・変わらないアメリカ」と題する連続会見を始めた。古矢旬氏の「ポピュリズム」、森本あんり氏の「宗教と反知性主義」、渡辺靖氏や会田弘継氏らの「トランプ現象」などは、米国の政治史や思想史にも触れる深い切り口を示したが、これらは「トランプのアメリカ」を分析する新シリーズへと引き継がれていくだろう。

EU離脱の連続会見では英独仏EUの大使を招いた。いずれも百戦錬磨の外交官だけにそのロジックとユーモアは印象的だったが、特に話題を呼んだのが独仏両大使による共同会見だった。

洒落な掛け合いに刺激されたかのように、欧州駐在経験を持つ編集委員や論説委員を中心に現役の記者か

ら次々と質問の手が挙がるのを見て、「記者会見はこうでなくては」とあらためて感じた。

● 論戦深める運営へ議論進めたい

米大統領選のディベートは時に醜悪極まりない応酬に陥ったが、翻って私たちのディベートはどうだっただろう。東京都知事選立候補予定者共同会見の303人を筆頭に、参院選公示前日の9党派首討論会、民進党代表選立候補者討論会は多くの参加者を集め、熱気に包まれた。

ただ、テレビやネットでも同種の催しが開かれるようになった今、日本記者クラブとして討論会や会見の進め方をより進化させ、論戦をさらに深めなければならぬという問題意識は、クラブ企画委員や多くの会員が共有しているところだ。各社アンケートも踏まえ、次に向けた議論を進めたい。

米大統領選や英国のEU離脱の報道では見通しなども含めメディアが批判にさらされた。だからこそ、報道の原点を考える企画にもこだわってきた。

「パナマ文書」報道をリードした日本の2人の記者は会見や記者研修会で調査報道の意義を繰り返し強調した。地を這う調査とデジタル技術

を組み合わせた調査報道でピューリッツァー賞を受賞した米AP通信の3人の女性記者は「ジャーナリズムは強靱な民主主義を支える柱であり、真実がわれわれを自由にする瞬間がある」「問いを発することを恐れるな。好奇心をもって質問し続けよう」というメッセージを残してくれた。

激流にさらされているのは世界秩序だけではない。私たちメディアを取り巻く環境も同じだ。

その点、今年の特徴ある活動は、20代から部長級まで幅広い年齢層が参加した記者ゼミ「次世代ジャーナリストの必須IT講座」。各社から講師を輪番で出し、社を超えて教え合うという新しい試みだった。自ら講師を務め、受講者でもあった全国紙記者はこう語っている。

「データジャーナリズムへの取り組みの必要性は感じていたのに、どこから手を付けていいのかわからないう、そんな状態から一歩踏み出すことができた。冷や汗をかきながら、突っ込み鋭い他社の記者に教えるという経験も勉強になった」

立ち止まってジャーナリズムの原点を確認し、走りながら明日のメディアに備える。この2つへの目配りは来年も忘れずにいたいと思う。

(朝日新聞社常務取締役編集担当)

あの会見 ①の言葉 2016年取材メモから

今年も多彩なゲストを招いて11月までで200件を超える記者会見や研究会を行ってきた。印象に残った言葉をメモ帳から拾ってみた。

(専務理事 土生修二)

梶田隆章さん(ノーベル賞受賞者)

「ノーベル賞受賞が続いて日本は浮かれているが、20年、30年後に日本から受賞者が出るかどうか……今のままなら日中逆転の可能性も」(1・7 記者会見)

藻谷浩介さん(エコノミスト)

「人件費を上げたらつぶれる、という企業はつぶれてください。人件費をちゃんと出す企業に若者を移動させる必要がある」(1・20 経済見通し)

菊地啓夫さん(宮城県岩沼市長)

「うちでは、自殺した避難住民は一人もいない。東日本大震災では集落ごと避難させたので避難地でも地域コミュニティが壊れずに残ったからです」(2・4 3・11から5年)

小笠原欣幸さん(台湾政治研究者)

「台湾の国民党は、歴史的役割を終え、今後、中国共産党の代理人のような中政党として存続していくしかない。これからは台湾アイデンティティーが基盤になっていく」(2・8 台湾総統選を読み解く)

志賀俊之さん(産業革新機構会長)

「日本企業はなんでも自前でやりたがる。技術者のプライドは大事だが、これでは世界から遅れてしまう」(2・19 チェンジ・メーカーズに聞く)

忍足謙朗さん(元国連WFPアジア地域局長)

「BBC、CNNは自分たちより先に紛争の現場に行っていることもあるが、紛争地で日本人記者に会うことが以前より少なくなった」(3・3 国連と日本人)

村田晃嗣さん(政治学者)

「教育と安保の類似点は容易にイデオロギー化しやすく、素人がもつともししいことを言いやすいこと」(4・5 安保法施行と日本の防衛)

菅波茂さん(熊本地震避難用テント村設営の支援団体代表)

「避難所では究極のプライバシーである夫婦の時間がなくなるが、テントはそれが確保できる。避難所に新しい選択肢を提供できた」(5・30 熊本地震報告)

アントワヌ・レリスさん(パリのテロで妻を亡くしたジャーナリスト)

「私も息子も憎悪の中だけで生きていくわけにはいかない。笑いたいし、楽しみたい、なにより自由でいたい」(6・28 著者と語る)

ティエリー・ダナさん(駐日フランス大使)

「英国のEU離脱は世界の終わりではない。英国とはEUができる前から友好関係にあった。EUの目標を明確にするよい機会となった」(7・6 BREXITとEUの未来)

茂木崇さん(ジャーナリズム研究者)

「これからジャーナリズムは、高給に魅かれて定年まで勤め上げる仕事ではなくなり、かえって純化されるかも」(7・26 著者と語る)

大江博さん(TPP首席交渉官)

「TPP交渉は、米国と対等に渡り合った珍しいケースだった。批准しなくても長期的には米国は戻ってくる。米国はそんなにバカじゃない」(9・29 記者会見)

井上康生さん(リオ五輪日本柔道男子監督)

「東京五輪に監督として臨めることは大きな誇り。ただ、日本記者クラブの会見で胃が痛くなるようでは……もっと大きなプレッシャーがかかってくるはず」(10・5 記者会見)

年末企画	
わたしのおすすめ本2016	4・5
クラブゲスト	6・8
B・ストークス米ピュー・リサーチセンター・ディレクター／グレン・フクシマ氏／渡部恒雄東京財団上席研究員／高見澤將林前内閣官房副長官補／須田美矢子キャノングローバル戦略研究所特別顧問／山口泰元日銀副総裁／高津克幸にんべん社長／川鍋一朗日本交通会長／J・シウコサリ駐日フィンランド大使／呉屋新城春美ブラジル日本文化福祉協会会長／アウンサンスーチーミャンマー国家顧問兼外相／朴柱奉バドミントン日本代表監督／東山篤規イグノーベル賞受賞者／永易至文行政書士／AP通信社ピューリッツアー賞受賞者／平岩俊司関西学院大学教授／横田耕一九州大名誉教授／川端清隆福岡女学院大学教授／坂口裕彦毎日新聞ウィーン特派員／F・ピロルIEA事務局長／柴田悠京大大学院准教授／国連財団／川人博弁護士／F・グランディ国連難民高等弁務官	
会見レポート	9・12
アウンサンスーチー氏／渡部恒雄氏、高見澤將林氏／東山篤規氏／ピューリッツアー賞受賞者／横田耕一氏／山口泰氏／ファティ・ピロル氏／川人博氏	
記者ゼミ	13
次世代ジャーナリストの必須IT講座	
ワーキングプレス	14・16
トランプ氏勝利	
ワシントン 日本テレビ 近野宏明	
東京官邸 毎日新聞社 野原大輔	
韓国 国政介入事件	
産経新聞社 加藤達也	
新・列島報告	17
大分県姫島村 中谷悠人	
被災地通信	18
鳥取地震 山陰中央新報社 勝部浩文	
マイBOOKマイPR	19
書いた話書かなかった話	20・21
戦場からメリークリスマス チャウシェスク政権崩壊	
伊藤千尋	
リレーエッセー	22
村山政権を支えた野坂浩賢氏	
共同通信社 川上高志	
私が会ったあの人 特別編	23
トランプタワーでインタビューした「未来の米国大統領」	
川端久雄	

わたしのおすすめ本 2016

12月号恒例の特集です。英国のEU離脱決定、トランプ氏の米大統領選勝利。そして韓国の混乱…国際ニュースが躍り、注目を集めた忘れられない年になりました。



そこで今年は9カ国の特派員に、それぞれの赴任国の視点も交え「おすすめの本」を寄せていただきました。ネット購入できる洋書もあります。年末年始休みの読書リストに加えてみてはいかがでしょうか。

▶石合 力 (朝日新聞社ヨーロッパ総局長＝ロンドン)

①希望の血

サミュエル・ピサール著、國弘正雄／川瀬勝訳 (講談社)

②僕の違和感 上・下

オルハン・パムク著、宮下遼訳 (早川書房)

③ボーン・トゥ・ラン ブルース・スプリングスティーン自伝 上・下

鈴木恵／加賀山卓朗訳 (早川書房)

①ホロコースト生存者でバーンスタインの交響曲第3番「カディッシュ」のテキストを書いた作家、国際弁護士の自伝。この体験こそ欧州統合を生んだはずだが……。彼を継父に持つプリンケン米国務副長官によると、本人がテキストに託した広島への思いは、オバマ大統領にも伝わった。②混迷のトルコ。ノーベル賞作家が市井の暮らしから時代を描く。③伝説のロックスターが洞察する米社会の姿と自らの苦悩。その郷土愛はトランプ氏の「愛国」とは異なるものだ。

▶今村 啓一 (NHKヨーロッパ総局長＝パリ)

①フランスはどう少子化を克服したか

高崎順子著 (新潮新書)

②Empires in Collision

Lord David Howell著 (Gillgamesh Publishing)

③はじめてのルーヴル 中野京子著 (集英社文庫)

①少子化対策で効果を上げたフランス。パリ在住の日本人女性が子育て経験をもとに、日本との比較も含め対策の具体例を紹介。②英サッチャー政権でエネルギー相などを歴任し原油20ドル台急落を予言したハウエル卿が、グリーンエネルギーと既存エネルギーが力を合わせ、安定供給と温暖化対策を両立させるための道筋を説く。③ルーヴルに行く前に読み、ルーヴルの中で読み、帰ってから読む。画家の生涯や時代背景がわかりやすく解説され、絵を見る楽しみが3倍になる1冊。

▶吉岡 良 (時事通信社カイロ支局)

①現代アラブの社会思想 終末論とイスラーム主義

池内恵著 (講談社現代新書)

②Orientalism

Edward W. Said著 (Penguin Random House)

③障害者の経済学 中島隆信著 (東洋経済新報社)

①アラブ世界でいわゆるイスラム過激派が台頭したことについて、時代状況を踏まえた思想的背景がわかりやすくまとめられている。2001年の米同時多発テロを受けて書かれた15年前の著作だが、本書で指摘される、アラブ世界における「国際テロに打って出る若者が出現することも理解できる不幸な閉塞状況」は現在も変わらない。過激派組織「イスラム国」(IS)が猛威をふるう2014年以降の事態も、歴史の必然ではないかと思えてくる。

▶岩田 智雄 (産経新聞社ニューデリー支局長)

①インドの軍事力近代化 その歴史と展望

スティーブン・コーエン／スニル・ダスグプタ著、斎藤剛訳 (原書房)

②アフガン・対テロ戦争の研究 タリバンはなぜ復活したのか 多谷千香子著 (岩波書店)

③インド洋圏が、世界を動かす モンスーンが結ぶ躍進国家群はどこへ向かうのか

ロバート・D・カプラン著、奥山真司／関根光宏訳 (インターシフト／合同出版)

①「戦略的抑制」をキーワードに、インドの軍事力を痛烈に批判した。兵器開発の欠点や装備調達での汚職問題も指摘している。最終章では、中国が台頭する中での米印軍事関係の重要性を訴えた。インドのモディ政権は、日米との関係強化を図っており、記者の「米国」を「わが国」に置き換えて読むことができるの解説は的確だ。インド軍の欠陥よりも、その構造や歴史についての知識を提供してくれる点で貴重な著書だろう。

▶ 國枝すみれ (毎日新聞社ニューヨーク支局長)

① Hillbilly Elegy A Memoir of a Family and Culture in Crisis

J.D. Vance 著 (HarperCollins Publishers)

② ふたつのアメリカ史 南部人から見た真実のアメリカ

ジェームス・M・バーダマン 著 (東京書籍)

③ 生きて、語り伝える

G・ガルシア＝マルケス 著、旦敬介 訳 (新潮社)

ドナルド・トランプ氏が米大統領選で勝ってしまった。①北東部や太平洋州のリベラル派は「南部、中西部、山間部の白人労働者の気持ちを理解していなかった」と反省し、南部人によって書かれ今年夏に出版された『ヒルビリー・エレジー』を読んでいる。②も、ピューリタンなど米国に流入した移民グループの分析から入り、南北文化の違いがよくわかる。③は夜、上等な酒を飲むように少しずつ読む本。

▶ 宮本 英威 (日本経済新聞社サンパウロ支局長)

① 水を得た魚 マリオ・バルガス・ジョサ自伝

寺尾隆吉 訳 (水声社)

② 戸井十月 全仕事

『戸井十月全仕事』編集委員会 編 (小学館)

③ 一投に賭ける 溝口和洋、最後の無頼派 アスリート

上原善広 著 (角川書店)

①2010年にノーベル賞を受賞し、中南米を代表する作家の自伝。幼少期から作家になるまでの回想と、1990年のペルー大統領選挙への立候補とアルベルト・フジモリ氏に敗れた経験が章ごとに交互に語られる。強権的な父親に否定されながらも、読書と創作に自分の生きがいを求めていく道筋は読み応えがある。②映像や文章などさまざまな分野で活躍した才人への追悼集。中南米をたびたびバイクで旅し、道端の出会いやにおいを大切に人だった。

▶ 栗田 晃 (東京新聞・中日新聞モスクワ支局長)

① 日ソ国交回復秘録 北方領土交渉の真実

松本俊一 著、佐藤優 解説 (朝日新聞出版)

② 何者

朝井リョウ 著 (新潮社)

③ クラウディアの祈り

村尾靖子 著 (ポプラ社)

①1956年の日ソ共同宣言調印に携わった著者の回想録。今年は60年の節目だが、当時の論点は解決せずに残る。②著者は私と同じ岐阜出身、中高大の後輩で勝手に親近感を抱いている。今年、若手人気俳優で映画化されたが、読後感はポップとはほど遠い重さ。③シベリア抑留後、ロシアに残った男性が51年ぶりに日本で待つ妻の下に戻る物語。送り出すロシア人の妻の思いが胸を打つ。こんな人間ドラマを発掘せねば。

▶ 五十嵐 文 (読売新聞社中国総局長＝北京)

① 国家はなぜ衰退するのか 上・下

ダロン・アセモグル／ジェイムズ・A・ロビンソン 著、鬼澤忍 訳 (早川書房)

② China2049

マイケル・ビルズベリー 著、野中香方子 訳 (日経BP社)

③ ウー・ウェンの北京小麦粉料理

ウー・ウェン 著 (高橋書店)

中国を知るには「鳥の目」も「虫の目」も求められる。①は世界各国の盛衰の歴史を縦横無尽に俯瞰して引き出した「理論」に基づき、中国の経済発展は共産党一党支配下ではいずれしぼむ、と预言する。②は中国軍部に深く入り込んだ米国人専門家ですら、見極めるのに数十年要したという中国の野望を描く。鳥にも虫にも近づけない自分を慰めてくれるのは、北京の食。食べ歩きの間合に③で皮から打つ餃子作りのイメージトレーニングを重ねている。

▶ 栗倉 義勝 (共同通信社ソウル支局長)

① 戦争は女の顔をしていない

スヴェトラーナ・アレクシエーヴィチ 著、三浦みどり 訳 (岩波現代文庫)

② 隔離の記憶 ハンセン病といのちと希望と

高木智子 著 (彩流社)

③ 冷戦の追憶 南北朝鮮交流秘史

金鍊鐵 著、李準恵 訳 (平凡社)

会って聞き出し、伝える。そんな営みが人の心を動かせるか否かは、結局は書き手の誠意と意志次第だと再確認させてくれたのが①と②。①は第2次大戦に従軍した旧ソ連の女性兵士らの体験談が独白形式で続く。彼女らの戦場が眼前に立ち上がってくる。②は国家が強いた不条理の中を生き抜いた人々の人生と言葉に胸を打たれる。③は南北交流の現場に身を置いてきた研究者が、平和構築の努力がなぜ必要か、観念ではなく実体験で説く。

山口 泰 元日銀副総裁



「金利低下も实体经济の刺激効果なし」「継続的円安は金融政策だけでは無理」「マイナス金利政策は判断ミス。深刻な危機でもないのに常識外の措置を突然実施した」「『2%実現』にこだわり副作用の大きい政策をやるのは見直すべき」。厳しい評価が続いた。

■ 11・21(月) シリーズ企画「<日銀検証>を検証する」④/司会: 実哲也委員/出席: 70人
11ページに会見レポート

高津 克幸 にんべん社長



元禄時代創業のかつお節問屋の13代目。近年はかつおだしを店頭販売で飲んでもらう「だしバー」や洋風だしと融合させたレストランなど事業を広げている。「化学調味料には香りがなく味が強すぎる。油がなく高タンパクのかつお節を国際的にも売り出したい」

■ 11・2(水) シリーズ企画「チェンジ・メーカーズに聞く」⑪/司会: 水野裕司委員/出席: 46人

川鍋 一郎 日本交通会長



タクシー業界最大手の若きトップ。スマホで車を呼ぶアプリ、陣痛タクシーなど新事業を展開。来年は初乗りを410円に値下げ、IT満載の「世界最高タクシー専用車」を走らせる。東京五輪ではトヨタと組み自動運転に挑戦。「タクシーは『拾う』から『選ぶ』時代」

■ 11・16(水) シリーズ企画「チェンジ・メーカーズに聞く」⑫/司会: 水野裕司委員/出席: 61人

ユッカ・シウコサーリ 駐日フィンランド大使



「フィンランド社会の強みはコンセンサスに立脚し、起業家精神に理解があること」。しかし近年は、「中東などからの難民流入で、均質が多文化のどちらをめざすかが問われ始めている」。欧州で少子高齢化が最も進行しており、労働力減少への対応が急務とも。

■ 11・1(火) 記者会見/司会: 脇祐三委員/通訳: 長井鞠子/出席: 51人

呉屋 新城 春美 ブラジル日本文化福祉協会会長



ブラジルの日系人社会を代表する「文協」初の女性会長。沖縄で生まれ、家族で移住したウチナーンチュでもある。「沖縄は戦争の時からずっと犠牲になっている。私も家は焼けてしまい、おじいさんの写真さえ1枚も残っていない。どうして今も沖縄だけですか」

■ 11・2(水) シリーズ企画「沖縄から考える」⑬/司会: 中井良則顧問/通訳: 大友恵美/出席: 31人

ブルース・ストークス

米ビュー・リサーチセンター国際経済世論調査部ディレクター



米大統領選は日本にとっても大ニュース。陰謀論から次回2020年選挙の見通しまで根拠り葉掘りの質問に「私もジャーナリストだったから、聞きたいことはわかる」と丁寧に答えた。トランプ現象の理由は「政治家を信頼できないから変化を求めるのかもしれない」。

■ 11・1(火) シリーズ企画「変わるアメリカ・変わらないアメリカ 米大統領選」⑫/司会: 石川洋企画担当部長/通訳: 宇尾真理子/出席: 68人

グレン・フクシマ 米先端政策研究所上席研究員



米民主党外交ブレーンの一人。「『真の改革はエスタブリッシュメント外の人間しかできない』との訴えを浸透させたのが勝因」と大統領選を分析。「トランプ氏が公約を実行すれば大混乱になる」。中央公論8月号寄稿の「トランプはなぜ日本嫌いののか」も紹介。

■ 11・11(金) シリーズ企画「変わるアメリカ・変わらないアメリカ 米大統領選」⑬/司会: 石川洋企画担当部長/出席: 71人

渡部 恒雄 東京財団上席研究員



「トランプ氏が共和党主流派にいかにかみ寄れるかが新政権のカギを握る」「新政権がうまくいかなければ怒りが共和党に向かう」「私がミシェル・オバマなら、今から大統領選の準備をする」「TPP発効は困難だがNAFTAやWTOの見直しまではいかないだろう」

■ 11・14(月) シリーズ企画「変わるアメリカ・変わらないアメリカ 米大統領選」⑭/司会: 杉田弘毅委員/出席: 72人

高見澤 将林 前内閣官房副長官補



安倍官邸で安保政策を立案した防衛官僚。トランプ政権との関係を理論的に語った。キーワードの1つはパッション(情熱)。「大統領個人の思い入れがあっても国際的には受け入れられない政策について、どう調和を図り顔を立てるか」。経験から出た解説か?

■ 11・16(水) シリーズ企画「変わるアメリカ・変わらないアメリカ」⑮/司会: 島田敏男委員/出席: 73人
9ページに渡部・高見澤両氏をまとめた会見レポート

須田 美矢子 キヤノングローバル戦略研究所特別顧問



日銀政策委審議委員を10年務めた経歴を持つ。「今の金融緩和は行き過ぎ」「政治任用で日銀審議委員は似た人ばかり」「審議委員には实体经济で実績ある人が必要」「次期総裁は政府と適正な距離が取れる政治力が必要」。今の日銀に対し、辛口コメントが続いた。

■ 11・2(水) シリーズ企画「<日銀検証>を検証する」③/司会: 福本容子委員/出席: 51人

平岩 俊司 関西学院大学教授



北朝鮮ウオッチャー。「核開発はもはや交渉カードではない。核保有前提の『現状凍結』を交渉材料にしたがっている」「オバマ大統領の戦略的忍耐で北朝鮮は米国を怖がらなくなり、その結果、安保面での対中依存度も低下した」「体制崩壊目前の観測は非現実的」

■ 11・14(月) シリーズ企画「北朝鮮の核とミサイル」③／司会：山本勇二委員／出席：62人

横田 耕一 九州大学名誉教授



天皇を研究対象にする憲法学者。「退位問題は天皇の意思で政治が動いており憲法的には大問題。天皇の意思を忖度して政府が主導すべきだった」「国事行為でも私的行為でもない公的行為を広く認めすぎる。被災地訪問は公務ではなく私的行為で行くのがよい」

■ 11・16(水) シリーズ企画「生前退位を考える」①／司会：傍示文昭委員／出席：48人
11ページに会見レポート

川端 清隆 福岡女学院大学教授



国連職員として25年間、安保理運営や地域紛争調停に関わった。「P5は政治的背景があり組み換え困難」「日本政府は国連日本人職員の戦略的意味を理解していない」「国連PKOにとって高練度の自衛隊はぜひ必要。日本ではPKOと自衛権が混同されている」

■ 11・18(金) シリーズ企画「国連と日本人」④／司会：土生修一専務理事／出席：32人

坂口 裕彦 前毎日新聞ウィーン特派員



ドイツをめざすアフガニスタン一家を追いかけて新聞に連載した同時進行ルポが本に。「途中で見失ったりしたが、現場でへーっと感じたことを書くのが新聞記者。日本の記者はみな泥くさく現場に入っていた。特派員網を維持してほしい」と最前線から切実な声。

■ 11・22(火) 著者と語る「ルポ難民追跡 バルカンルートに行く」／司会：川村晃司委員／出席：33人

ファティ・ピロル 国際エネルギー機関(IEA)事務局長



「今後の勝者は天然ガスと再生可能エネルギー。一方で石油の消費も伸び続ける。なぜならトラック燃料、航空燃料、石油化学は石油の代替物が見つからないから」「国際的なエネルギー連携は経済面だけでなく外交面からの考慮も必要。一国依存は危険」

■ 11・25(金) 記者会見／司会：脇祐三委員／通訳：西村好美、木場啓美／出席：52人
12ページに会見レポート

アウンサンスーチー ミャンマー国家顧問兼外相



当クラブの会見は3年半ぶり。今回は反政府リーダー、今回は事実上の政府最高指導者として登壇した。「現行憲法は真に民主的ではなく改憲に努力する」「中国を含め全ての国と仲良くしたい」。毅然、時に微笑みを交えての30分余の会見となった。

■ 11・4(金) 記者会見／司会：伊藤芳明理事長／通訳：西村好美、大野理恵／出席：290人
9ページに会見レポート

朴柱奉 バドミントン日本代表監督



韓国で「ダブルスの神様」と言われた名選手。日本代表監督歴も12年間の長期になる。リオ五輪女子ダブルス決勝では「相手の疲れを読み、体の遠くに打つよう指示」して逆転につなげた。事前メモを作成し、質問にも丁寧に対応、誠実な人柄が伝わってきた。

■ 11・7(月) 記者会見／司会：山本勇二委員／通訳：長友英子／出席：28人

東山 篤規 イグノーベル賞受賞者 立命館大学教授



出席者みんなで股のぞきを実行した。役に立ちますか、との質問に「何の役にも立ちません。立たなくてもいい。見ている世界が体とどう関係するのか好奇心だけ」と言い切る。「自分にとって面白いことを伝えるために修業している。よく遊びよく学べ、です」

■ 11・9(水) 記者会見／司会：安井孝之委員／出席：41人
10ページに会見レポート

永易 至文 NPO法人パープル・ハンズ事務局長・行政書士



1990年代、自分の性的傾向を誇りを持って受け入れた「ゲイ1期生の50歳」と自己紹介。ライター、行政書士、NPO事務局長として、高齢期を迎えるLGBTの病氣、介護、相続など老後の課題に取り組んでいる。「足元を見つめ、今できることをやるしかない」

■ 11・10(木) シリーズ企画「LGBTと社会」④／司会：宮田一雄委員／出席：17人

AP通信社 ピュリツァー賞受賞者
マジー・メイソン氏、マーサ・メンドーザ氏、
エスター・トゥサン氏、テッド・アンソニー氏

インドネシアの漁船で続くミャンマー人の「奴隷労働」を女性記者チームが特ダネ報道。魚は米国の食卓にも並んでいた。2000人が解放され米国の法律が改正された。「船の動きはネットで追跡できる。日本の企業も関わっていた」。さあ、次は日本人記者の出番だ。

■ 11・11(金) 記者会見／司会：坂東賢治委員／通訳：長井鞠子／出席：60人
10ページに会見レポート

かわひと ひし 弁護士
川人 博

長年、過労死訴訟にかかわってきた。戦前の織物業から現代の電通まで具体例を挙げて、その深刻さを訴えた。「仕事がらみの自殺は昨年2000件以上だが労災認定は4%だけ」「サービス業では『お客様は神様』が前面に出すぎ。働く者への配慮がなさすぎる」

■ 11・29 (火) シリーズ企画「働き方改革を問う」①／司会：竹田忠委員／出席：59人
12ページに会見リポート

しば た はるか 京都大学大学院准教授
柴田 悠

「保育サービスに予算をつぎ込めば日本は救われる」と提言。「議論を巻き起こしたい。経済学者が深く分析してほしい」。保育所を増やし保育士の給与を引き上げると、経済成長率が上がり自殺率が下がる、と統計を解説。政策効果の分析は報道の仕事でもある。

■ 11・28 (月) 著者と語る「子育て支援が日本を救う」／司会：中井良則顧問／出席：42人

フィリッポ・グランディ 国連難民高等弁務官



今年1月に就任以来、2度目の当クラブでの会見。今回の来日では日本政府に難民受け入れ拡大を要請したが、「日本は難民に慣れておらず、受け入れ拡大には時間がかかりそうだ」と述べた。シリア情勢は「政治的解決しかないが楽観できる状況ではない」。

■ 11・29 (火) 記者会見／司会：杉田弘毅委員／通訳：賀来華子／出席：49人

国連財団

キャシー・キャルビン会長、スーザン・メイヤーズ
上席副会長、小和田恒・理事

国連財団はCNN創業者のターナー氏の寄付で創立された「国連応援団」。米国第一主義のトランプ新政権は、国連にとってやっかいな相手になりそう。キャルビン会長は「トランプ氏が大統領になれば成長すると期待したい。地球温暖化対策などでは私たちも声を上げていく」と述べた。

■ 11・28 (月) 記者会見／司会：中井良則顧問／通訳：西村好美／出席：26人

会見余話

●「質問したかった。みんな手を挙げないし」

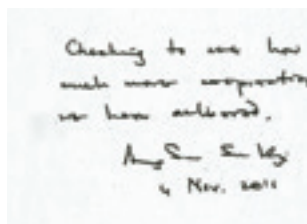
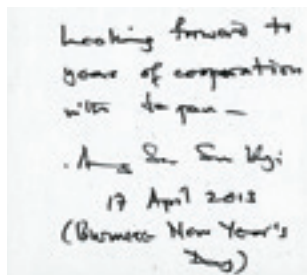
アウンサンスーチーさんの会見で真先に立ち上がり、勢いよく手を挙げたのはミャンマー・ナショナル・テレビの女性記者、ウィン・ザーニ・アウンさん。ミャンマー語で質問し、スーチーさんが「今の質問は、日本訪問で何を待たか、です」と英語に通訳した。司会の伊藤理事長が「ゲストが通訳したのはクラブで初めてかもしれない」と述べると、スーチーさんは「私は慣れています」と応じ、笑いが広がった。

ザーニさんは「スーチーさんは国家顧問になつてからあまり記者会見を開かない。なかなか

ゲストブックから

◀アウンサンスーチー・ミャンマー国家顧問兼外相

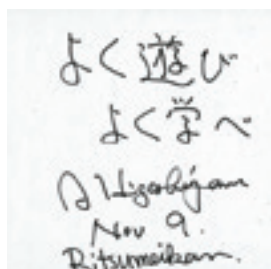
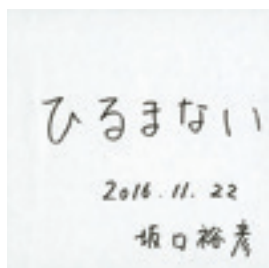
野党時代に書いた「今後の対日協力関係に期待して」との3年前の揮ごう(上)を見ながら、「続きを書くわ」とつぶやき「すでに成し遂げた協力関係をより一層…」と記した。



東山篤規

イグノーベル賞受賞者▶

学校では「遊び方」は教えてくれない。自分で「楽しいな、面白いな」と感じる事が大事。根幹は「よく遊ぶ」こと。



◀坂口裕彦・

前毎日新聞ウィーン特派員「ひるまない」のころは取材相手をどこまでも追いかけて、諦めず記事にする意気込み。

質問の機会がないので、今日はぜひとも聞きたかったんです。それに、皆さん、手を挙げてなかったし。ミャンマーの記者会見では記者は一齐に質問を求めます。おとなしい日本人記者に少し驚いたようだ。

民主化とともにジャーナリズムが急に広がった。「私たちはニユージエネレーション。スーチーさんが会見で報道の自由には責任が伴うと言ったけれど、その通りです。ネットやソーシャルメディアでニュースを奪い合い、正確でない記事もある。あ、急がないと」。25歳で「副チーフリポーター」の肩書を持つザーニさんは、スーチーさんを追いかけて会場を飛び出した。

(中井良則)

アウンサンスーチー

ミャンマー国家顧問兼外相

国家背負うリーダー
にじむプライド

安倍首相や岸田外相との会談、天皇皇后両陛下との会見、そして80年代半ばを過ごした京都大学からの名誉博士号の授与。8千億円規模の日本からの支援にも合意した5日間の滞在を「真の友好関係の頂点に立つような経験」と振り返った。

3年半前は、民主化に向けて闘う野党・国民民主連盟の指導者として来日した。今回は、山積する課題を抱える国家を担う、指導者としての姿があった。

軍事政権下に成立した現行の憲法を「真に民主的なものではない」「確約はできないが、改憲のため、懸命に努力する」と述べて、新政権の5年の任期中に改正を実現する意欲を、あらためて示した。

政権に就いて真っ先に訪問した中

国との関係を「極めて良好であり、もっと良くなってほしい」と言い切った。「敵対的な国は作りたくない。日本を含む全ての国と友好的な関係を築きたい」とも。「また、この質問ね」という表情をにじませながら「全方位外交」を強調した。

軍・警察によるイスラム教徒ロヒンギャへの弾圧問題については、「調査し、法に基づき対処する」と繰り返し返した。

見出しにならないようなやりとりにも、こだわりがうかがえた。最高指導者と呼ばれると即座に否定し、「私は与党の党首。最高指導者は国民です」。訪日のメリットを聞かれると、「何かもうおもうと思って来ているわけじゃない」。日本の男女格差については、「経済の豊かさが達成されれば変わるはずなのに、日本はそうではない。どうしてなのか、教えてほしい」とチャクリ。

日英同時通訳で会見は進んだ。ミャンマー語による記者の質問には、自ら通訳し、自ら答えた。恐縮する司会者に「慣れていますから」。国際社会に対する「報道官」をも長く兼ねてきたスーチーさんの歴史を、思わずにはいられなかった。

朝日新聞社編集委員 吉岡 桂子

渡部 恒雄 わたなべ つねお
東京財団上席研究員

高見澤 将林 たかみさわ のぶしげ
前内閣官房副長官補

トランプで変わる点
変わらぬ点

トランプ当選直後の会見。しかも、渡部恒雄、高見澤将林という得難い2講師に関心は高かった。

渡部氏は、自らはヒラリーが逃げ切ると予測していたと率直に告白、最終局面で民主党側の運動員の足が止まったのではないかと、と玄人見立てを披露した。「トランプ周辺も勝つてうれしそうではなかった」との観察も付け加えた。選挙戦をビジネスに利用してきたトランプ陣営に、当選は果たして本当の意味での勝利だったのか、という疑問だ。今後、大統領という公職と私的ビジネスとの間で利益相反が起きないか、という指摘もナルホドと思った。本当は大統領にならなくなかった。もう一步で大統領になれたビジネスマンでいたかった。それが実は真相ではないかと私は楽しく想像してしまった。それはそれ。トランプ新体制はいかに。渡部氏は、反目してきた共和党本流とどう協調するかがキーになると言う。3000人の政治任用が入れ替わる米国で、しかも議会承認ポ

ストが多いだけに本流人脈も使わないと人材登用もままならない、とのことだった。その後の動きを見ると氏の予想通り、人事ではそれなりの妥協路線に入ったとの印象である。

高見澤氏は、民主主義的選挙プロセスにおける世界的な現象として、①政治の困難化②価値の動揺③格差の増大④情報の拡散⑤内政の重視、という5つの特徴があるとして、米大統領選を緻密な理論で整理。わかりやすかったのは、オバマ政権との比較だ。オバマが個別安保問題では口先介入のみに留め実力行使を控え、気候変動などの国際的共通課題の解決には積極的だったのに比べ、トランプ新体制は、むしろその逆をいくのではないかと、と言う。

そして、一度米国抜きの国際システムというものを考えて、米国の価値を捉え直してはどうか、と。興味深い問題提起だ。やはり「米国しかない」となるのか。中国がそれに取って代わる役割を果たせるのか。高見澤氏と言え、安倍政権の官房副長官補（7月に退任）として安保法制を仕切っていた人だ。トランプ誕生で新法制の運用がどう変わるか。これまた聞き落としてしまった。

企画委員 毎日新聞社専門編集委員

倉重 篤郎

A P通信社 ピュリツァー賞受賞者

AP女性記者たちが語った 「志の高さ」

インドネシア東部、アラフラ海のベンジナ島に奴隷のような労働を強制されているミャンマー人船員がいた。その存在を突き止め、各国政府を動かして2000人の解放につなげた。調査報道の鑑のような記事で



ピュリツァー賞を受賞した5人の女性記者のうち3人が、会見で取材の詳細を紹介してくれた。

途上国では「奴隷労働」の存在はまれではない。ジャカルタ駐在のマジ・メイソン記者（右から2人目）は情報を得た時、どんな切り口で関心と呼ぶかを考えたという。そこで①当事者から直接、話を聞く②米国にも「奴隷労働」によって加工生産された魚介類が流れ込んでいくことを証明する——という2つの目標を立てた。

現地を訪れたミャンマー特派員の

エスター・トウサン記者（左から2人目）が監禁されていた船員からミャンマー語で話を聞き、島に停泊する船の名や番号などを片っ端からメモした。見知らぬ外国人の存在がうわさになり、危ない思いもしたという。

現在、バンコクに駐在するマーサ・メンドーザ記者（右端）は、この記録を元に専門のサイトで船の運航状況を追跡し、税関当局などへの取材も重ねてバンコク経由で米国にも水産物が上陸している実態をつかんだ。同記者によると、日本の大手水産会社の名前も浮かんだという。

通信社が調査報道に力を入れ始めていることも興味深い。アジア太平洋ニュースディレクターのテッド・アンソニー氏（左端）によれば、昨年、AP通信のツイッターで最も多くシェアされたのが今回の調査報道だった。

3人の記者は一般ニュース取材と並行して調査報道を続けたという。インターネット時代にも志の高い記者は少なくない。民主化を果たして間もないミャンマー出身のトウサン記者が「ジャーナリストは社会の変革者だ」と話したことも印象的で、同業者としてさまざまな刺激を受けた会見だった。

企画委員 毎日新聞社専門編集委員

坂東 賢治

東山 篤規

イグノーベル賞受賞者
立命館大学教授

面白いことで 「よく遊び、よく学べ」

会見出席者に「股のぞき」を促し、多くの人が股から見える様子の妙を体験した。普通の姿勢で見ると、奥行き感が少なくなり、遠くのもの、残念なことに私は実感できなかった。



東山さんによると、個人差があるらしい。

海外の研究者が指摘していた現象を、30人の大学生に股のぞきの実験をさせ、ちゃんとしたデータで確かめてみせた。それがイグノーベル賞の受賞につながった。

大の大人が股から見える世界をあれこれ議論するというけつたいな話なのだが、次々に実験結果を示すグラフを見せられると、なるほど真面目な研究だと思えるのだから、不思議なものである。

心理学を勉強したいと文学部に入

り、実験心理学を修めた。学生時代に錯視という現象を「面白いなあ」と感じたことがその後の人生を決めた。普通に立って、塔など高いものを見ると、人は実際の高さより高く感じるという。それが錯視。ところが寝転がると、見え方がまた違う。

「面白いでしょう」と東山さんは言うのだが、若い頃なら他にももつと面白いことがあったんじゃないかと内心思ったが、「人それぞれに判断基準がありますから」と、やっぱりかわされた。そりゃそうだ。みんなが同じものを面白いと感じるようになるのなら、この世はいささか危険である。多様性があればこそ、この世の面白さである。

股のぞきの研究を「役に立ちません」ときっぱり。「役に立つ研究」を迫る風潮があるが、役に立つ、立たないという判断基準は一律であろうはずはない。

「股のぞきの研究は、面白いなあ」と人々を喜ばせています。その点は役に立っています。なるほど、いろんな役立ち方があるわけだ。「よく遊び、よく学べ」と揮ごう。知的好奇心は、まず「学べ」からは生まれない、という思いを込めた。

企画委員 朝日新聞社編集委員

安井 孝之

ファティ・ビロル

国際エネルギー機関（IEA）事務局長

温暖化対策「大幅に加速を」 トランプ次期米政権に警戒感

地球温暖化対策のバリ協定から離脱する意向を示していたトランプ氏の米大統領選勝利で、環境エネルギー分野でも先行きに不透明感が漂っている。IEAのビロル事務局長は



会見で「各国政府が行動を取らなければ、私たちに心の準備が必要だ。世界は今と全く違う様相になるだろう」と述べ、温暖化対

策の遅滞に伴う代償の大きさを訴え、強く警鐘を鳴らした。

協定は、産業革命前からの平均気温上昇を2度未満に抑える目標を掲げている。ビロル氏は、世界の温室効果ガス排出量の3分の2を占めるエネルギー部門にその成否がかかるとしたうえで、現状では、各国の削減目標が全て達成されても「まだ2・7度上昇する」と指摘。「道筋

からはるかに離れている。各国がかなり大幅に努力を加速しないと実現できない」と強調した。

トランプ次期政権の政策については「米国にとどまらず全世界に影響を及ぼす」と警戒感をにじませつつも、現時点では「時期尚早で、はっきりしたい」と述べるにとどめた。

ビロル氏はまた、IEAが発表したばかりの16年版「世界エネルギー見通し」をもとに、2040年までの各エネルギーの展望を語った。過去25年間で「最大の勝ち組」だった石炭の消費が鈍化し、次の25年間は、太陽と風力を中心とした再生可能エネルギーと天然ガスに「勝ち組」が変わるとの見方を示した。

再生エネは費用対効果の向上でとりわけ発電部門で浸透が進み、「かなりの成功物語が見られた」と指摘。中国を「再生エネのチャンピオン」と評した。天然ガスでは、米国や豪州などから大量の液化天然ガス（LNG）が市場に供給されることで、シェールガス革命に続く「第2次革命」が起きる可能性に触れた。

一方、石油と石炭は、需要は増えるものの、その伸びは鈍化するとの見通しを示した。

朝日新聞社GLOBE編集部

村山 祐介

川人 博

弁護士

なぜ彼女は 死に追い込まれたのか

安倍政権が最重要課題として取り組む「働き方改革」。長時間労働の是正に向けて、国が本気で取り組む一歩になるかもしれない。

そんな見方に冷や水を浴びせるかのように発覚した、電通の過労自殺



問題。入社したばかりで、未来はこれからという高橋まつりさん（当時24歳）は、なぜ、過労自殺に追い込まれたのか？「働き方

改革」を考えるシリーズ1回目は、遺族の弁護士で、長年、過労死問題に取り組んでいる川人博弁護士にご登壇いただいた。

際限のない長時間労働と、上司による人格を否定するパワハラが今回の過労自殺の原因と見られている。川人氏によると、これは同じ電通で1991年、やはり当時24歳の男性社員が過労自殺した時と同じ図式だ

という。問われているのは、人権を軽視して人をこき使い続ける企業風土だと指摘する。

では、どうすべきか？ これ以上働かせてはならないという絶対的規制を法律で定めることが不可欠であり、そのために有効なのが、勤務間インターバル規制。EUでは、24時間につき最低連続11時間の休息時間を義務化していて、夜11時まで残業した場合は、翌日の開始は午前10時まで免除される。政府は企業の自主的な導入を推奨するにとどまっているが、義務化こそが必要と氏は訴える。

過労自殺は高度経済成長以降に顕在化したと見られがちだが、実は既に昭和初期、長野県下で多数発生していた。諏訪湖周辺に集中する製糸工場で働く若い女性たちが、重労働に耐え切れず投身自殺する悲劇が後を絶たず、娘たちの遺体で諏訪湖が浅くなったとまで、当時言われたという。ほとりには今も無縁墓地が残っている。

「労働現場の苛酷な状況は、実は、戦前と今とで何も変わっていないのではないか」。川人氏のこの深刻な問いをシリーズを通して考えていきたい。

企画委員 NHK解説委員 竹田 忠

60
記者ゼミ

月の参院選の政党別選挙

その後の実習では、7月の参院選の政党別選挙

6月のQGIS入門に続いて、位置情報や地図や写真を重ね合わせて視覚化するシステム、GISについて実習した。今回はESRIジャパンの有料ソフト「ArcGIS Online」を使い、記者ゼミ登録者以外の記者も参加して、部屋いっぱい長机が並んだ。数人ずつの島々に分かれてパソコンをのぞき合い、随時質問せざるを得ないいつもの回とは違って、うれしいことに内容が理解できた回だった。

初めにESRIジャパンの藤澤秀行取締役から「GISの習得にはすぐ時間がかかる。大学で2年間勉強する必要がある、1つの学問分野になっている」と説明があり、ほつとした。6月のQGIS入門は、途中でつまずくといいていけなくなり、いろいろな方に手伝ってもらって、やっと課題が完成したからだ。できなくても無理はなかったのだ。

中村美奈子

毎日新聞社デジタル報道センター副部長

ArcGISの紹介 有料ソフトの威力実感

10・18(火)講師：藤澤秀行・ESRIジャパン取締役、宇田川藍・ジャグジャパン取締役ほか／出席：30人+ネット視聴3人

6月のQGIS入門に続いて、位置情報や地図や写真を重ね合わせて視覚化するシステム、GISについて実習した。今回はESRIジャパンの有料ソフト「ArcGIS Online」を使い、記者ゼミ登録者以外の記者も参加して、部屋いっぱい長机が並んだ。数人ずつの島々に分かれてパソコンをのぞき合い、随時質問せざるを得ないいつもの回とは違って、うれしいことに内容が理解できた回だった。

初めにESRIジャパンの藤澤秀行取締役から「GISの習得にはすぐ時間がかかる。大学で2年間勉強する必要がある、1つの学問分野になっている」と説明があり、ほつとした。6月のQGIS入門は、途中でつまずくといいていけなくなり、いろいろな方に手伝ってもらって、やっと課題が完成したからだ。できなくても無理はなかったのだ。

結果を地図に重ね合わせ、色分けしてインターネットに公開するまでの作業を体験した。ArcGISのユザーで、選挙コンサルティング・ジャグジャパンの宇田川藍取締役を講師に、ゆっくり確実に作業が進む。有料ソフトだけあって手順が簡単で、素人でも画面写真がたくさん入った説明書があればなんとかできそう。一目で分かる自民党の勢力図が時間内に完成した。エンジニアとデザイナーがいなければデータジャーナリズムは無理だと思っていたが、記者だけでもコンテンツが作れそうな気がしてきた。

ただし、基になるデータを作る過程にかなりの時間がかかりそう。7月の都知事選で主要3候補が演説した箇所をジャグジャパンが地図に落とし、最後に見たが、各候補の演説箇所がどこかに都合よく一覧表示されているわけではない。

ツイッターやフェイスブック、ユーチューブなどから演説箇所の公開情報を全て洗い出し、使えるようにするまでに手作業がずいぶん必要だったという。便利なツールで表現するに足るデータ作りが、これからの記者の仕事に加わるのだろう。

Python入門

「見えないもの」が増える危機感

11・1(火)講師：松波功・中日新聞電子編集部／出席：15人+ネット視聴4人

第10回は「Python入門」プログラミングの基礎の基礎。プログラミングといえ、大学で理系の友人が話題にしていた記憶しかない。文系の自分とは無縁だな、というのが正直な印象である。

さて、講義では講師の指示に従い、パソコン画面に命令を打ち込んで実行させるといふことを繰り返した。「1+2を計算して表示しなさい」や「Hello」という単語(文字列)を表示しなさい」といった命令からスタート。講師の画面をまねて同じように手を動かすと自分の画面に「3」や「Hello」と表示された。

意外と簡単じゃないか、と思ったが、当然そんなに甘いわけがなく、次の段階で早速つまづいた。講師が用意したソフトウェア「整数足し算電卓」を実行させるとエラーが発生、正常に動くようにプログラムを書き換えるというのが課題だった。「なんでもない作業」とのことでは

確かに周囲では既に次の課題に取り組んでいる姿もある。筆者は画面をにらみ、頭をひねり、キーボードを繰り返したいたが、画面には延々とエラーの文字が並んだ。

講師の解説を聞けば、確かに「なんでもない作業」だった。自力で答えが出なかったことに悔しさはあったが、それよりもプログラミングという世界の広さを感じた。この日、筆者が体験したのはプログラミングの基礎の基礎だが、世の中ではこの日の講義で見聞きしたものとは比べものにならないほど複雑なプログラムが日々更新されているからである。

専門家としてプログラミングの全てに精通することは難しいし、そこをめざすのも現実的ではない。しかしプログラムの作成方法や環境などに全くの無知であることは世の中の多くの部分(それはIT化の進む現代社会では極めて重要な役目を果たしている部分)が「見えなくなる」とことを意味する。そこを「見える」ようにするために自分でもプログラミングの言葉々を習得するしかないのだ。腹をくくるしかない、と感じた。

読売新聞東京本社メディア局営業部

木口 祥吾

61
記者ゼミ

アメリカ大統領選 ワシントン

近野 宏明(日本テレビ)

「常識破りが前例となった」 トランプ氏の勝利

きょうは11月28日。今年4月号のクラブ会報に掲載された拙文を読み返しながら、今回の米大統領選を振り返っている。タイトルは「常識破りが前例となるのか」。結びは「戦いが終わった時、トランプ旋風という現象が『常識』破りの新たな『前例』となることだけは、間違いなさそうだ」とある。当然、その時点では今、世界が直視している現実を誰も予期していない。私に至っては、投票日の深夜、開票が進むまで夢にも思わなかった結末だ。

11月8日、投票日の朝、クリントン、トランプ両候補の支持率や獲得が予想される選挙人の数など、各種の調査の最新情報をチェックした。軒並み、クリントン氏の優勢を示す「常識的なデータを見て、正直、今夜自分は、米史上初の女性大統領が誕生する歴史の1ページを目の当たりにするものだ、と思い込んでいた。投票が終わわり、日本時間の午前中からずっと、あらゆる報道・情報番

組はもちろん、特別番組でもその前提のもとリポートした。しかし、午後帯に入ると、どうも異なる空気が漂ってきた。午後2時からの情報番組「ミヤネ屋」で読売テレビの春川正明解説委員長と並んで情勢と背景をリポートしつつ、このままでは予期せぬ結果が生じる可能性もあると予期。いったんマイクを切り、画面のフレイムから下に外れて：逃げ場のない数十センチ四方の狭すぎるスペースゆえ、べつたりと座り込んで、機材やケーブルにまみれながら、パソコンを膝にトランプ氏優勢の状況に基づく解説を書き始めた。

クリントン陣営会場で トランプ優勢をオンエア

すると、春川委員長が、このシーンを生放送のカメラに映してもいいかと尋ねてきた。クリントン陣営の勝利集会の会場で、クリントン氏の優勢を確信していた私が「トランプ優勢」の原稿を書き始めている、こ

の状況こそが、全てを象徴しているという。大統領選を2年以上取材してきた記者が、この局面で追い込まれている姿は格好の良いものではないが、確かにそれこそが、この「常識」破りの選挙の今を象徴するシーンだ。

一も二もなく首肯すると、次の生中継に乗るや、春川委員長はカメラを下に振るよう指示、キーボードをたく私の姿がフレイムの中に入っ

印象深かった 「よろい」脱いだヒラリー

結果が出てから3週間。トランプ氏は自らの政権人事を進めている。と同時に、一部の政策については軌道修正の可能性もおわせつつある。選挙期間中、いつかそうなると言われ続けていた「常識」への接近なのかは、まだ明確に判断はできない。

他方、人事はというと、過激な思考の持ち主、物議を醸してきた人物を安全保障政策の重要なポジションに置いて、「トランプ色」をしつかり維持している。この過激さがどこま



果然——ごく狭い中継ポジションに座って原稿を打つ筆者(日本テレビ提供)

で貫かれるのかはまだわからない。選挙期間中、主にクリントン氏を取材してきた私の印象に残ったのは、戦いを終えて敗北宣言をする彼女の姿だ。肩の荷が下りたような、幾分ほっとしたような様子、力の程よく抜けた率直な話しぶり。

公の場ではヒラリー・クリントンという「よろい」を着続けてきたかのような彼女が、もともとずっと早い段階でこの姿を見せていたら、有権者のヒラリー観は変わっていたのではないかとすら思えた。その日まで王道の選挙戦術という「前例」に忠実だったクリントン氏が敗れたこともまた、今回の選挙を象徴していた。この・ひろあき▼1995年入社「NEWSリアルタイム」キャスター 政治部を経て、2013年からこの11月までワシントン支局長

トランプ氏勝利 東京官邸

野原 大輔(毎日新聞社)

会談「成功」は思惑が一致 本音見えぬ新リーダーに手探り続く

安倍晋三首相とトランプ次期米大統領との11月17日の会談は、演出がかった。首相は会談後、記者団に対し「トランプ氏は信頼できる指導者だ」と振り返り、トランプ氏も呼応するように「すばらしい友人関係が始まった」とフェイスブックに書き込んだ。一緒に載せた首相とのツーショット写真では満面の笑みを浮かべている。

異例ずくめの会談だった。首相が就任前の大統領に会うことも異例なうえ、時間は1時間半に及んだ。さらにトランプ氏は主要国首脳と初の会談であり、事実上の外交スタートを飾るものだ。

しかし、冒頭取材はおろか、会場のトランプタワーの入り口にも近づけず、会談の中心は一切公表されなかった。場所がトランプ氏の個人宅であり、「首脳会談のようになってはいけない」(官邸幹部)というオバマ大統領に配慮した側面はあるにせよ、トランプ氏は現在、世界で最も

注目される人物だ。対応に違和感を覚える一方で、ゴルフ用品をプレゼントし合ったという情報は伝わるなど、両氏の友好ぶりだけが前面に出た会談だった。

大統領選開票日 浮足立った永田町と霞が関

トランプ政権が誕生すれば日米同盟と環太平洋経済連携協定(TPP)への懸念が大きく膨らんでしまう。官邸は大統領選の当日、浮足立っていた。首相は開票速報を見守りながら「予想外に競っている」と漏らし、秘書官らもテレビに食い入った。開票が進むにつれ、各省庁の幹部は「トランプになったら予測がつかない」(防衛省幹部)などと頭を抱えた。「ヒラリーに間違いない」と報告していた外務省局長は真っ青になっていたという。

そんな中で、10日の電話協議に続き17日の早期会談は、トランプ氏の日米同盟重視の姿勢を印象づけるこ

とができ「大金星」といえる。トランプ陣営への接触は今年に入ってからだったといい、「最初は何も関係がなくて、じゅうたん爆撃みたいにして引っかけた」という感じだった(外務省幹部)と言う。

ただ、過激な発言を繰り返し、同盟国に米軍の駐留費のさらなる負担を求めてきたトランプ氏側の計算も見え隠れする。同盟の代表格である日本の首相との会談の成功は、指導者としての資質に対する疑念を拭い去ることに加え、他の同盟国にも安心感を与える。会談の「成功」は、日米の思惑が一致したからだろう。

TPP「攻めた」首相 しかし直後に…

これに対し、TPPは首相が自ら「攻めた」といえる。17日の会談直



トランプ次期大統領との会談を終え、記者団の質問に答える安倍首相(11月17日/ニューヨーク/共同通信社提供)

後はアジア太平洋経済協力会議(APEC)首脳会議が控えていた。いや応なく首相の注目度は上がり、外交上の「チャンス」でもあった。

首相は外遊直前にオーストラリアのターンブル首相と電話協議。APECに合わせペルー、カナダ、ニュージーランド、ベトナムとTPP参加国の首脳と立て続けに会い、早期発効の重要性を確認した。TPP首脳会合では「各国が発効に向けた国内手続きを進める」ことで一致。

外遊を締めくくると21日の内外記者会見では「TPPは米国抜きは考えられない」と強調した。「日本主導でTPP反対のトランプ氏を翻意させる」。首相の頭の中にはこんな戦略が浮かんでいたはずだ。

しかし、皮肉なことに記者会見の後、「トランプ氏が就任初日に離脱を参加国に通知すると表明した」とのニュースが駆け巡った。タイミングの悪さに「本当にトランプ氏と信頼関係を築けるのか」との疑問も出始めている。

トランプ氏の本音は何なのか。当面はトランプ氏の出方におびえながら手探りの状態が続くそう。

のはら・だいすけ ▼1999年入社 政治部 経済部などを経て2015年再び政治部 今年9月から官邸サブキャップ

韓国 国政介入事件

加藤 達也(産経新聞社)

「降霊術師」も預言できなかつた？
朴槿恵大統領の迷走

韓国の朴槿恵大統領が危機に陥っている。清廉なイメージを売りにしていた朴氏が、シャーマン(降霊術師)とも指摘される親友の崔順実被告と濃密な関係結び、国政に介入させたうえ、見返りに莫大な利権を与えていたとみなされているのだ。

朴氏が「憲政史上初の容疑者大統領」(韓国メディア)となった事態は、約40年も前からの人脈を下敷きに起きた、古くて新しい問題だ。

筆者は2014年10月、記事で朴氏の名誉を傷つけたとして起訴された。このとき朴氏側が問題視したのは、産経新聞ウェブ版(14年8月3日付)に掲載したコラムだった。朴大統領はセウォル号沈没事故当日、7時間にわたって所在不明になり、その間、ある男性と共にいたというウワサがあると伝えた。その男性の当時の妻こそ、崔被告そのものだったのだ。

公判で無罪となったものの、特派員を執筆記事をもって捜査、起訴す

るという強硬対応については、当時から「なぜ？」という疑問が付きま続った。

今回の国政介入事件で朴氏をめぐり秘せられた人脈が明らかになったが、筆者は「なるほど、やつぱりそこでしたか」と、ようやく当時の強硬対応も平仄が合う思いがした。

もちろん、いま韓国を揺るがせている大統領の犯罪について「あなたはその当時、どこまで知っていたのか？」と問われれば、正直に「まったく知らなかった」と答えざるを得ない。その点、新聞記者として不明を恥じている。現職大統領をめぐる闇がこれほど深いとは、想像のはるか上を行く出来事だった。

違和感残った取り調べ
疑惑の構図がすめていたのか

ただ、筆者はソウル中央地検の取り調べの際の追及ポイントがずっと引っかけかかっていた。

検事は問題とされたコラムで筆者

が、崔被告の実父・崔太敏氏(故人)と、当時の夫・鄭ユンフェ氏について実名を挙げ、朴大統領と「親密」であると断定したのはなぜか？ 情報源は誰か？ 「共犯」はいないか？ と執拗に尋ねてきた。筆者は「これが、朴大統領が抱える最大の急所か」と感じたのだが、検察の捜査、取り調べ自体が「この人々に今後触れることは一切まかりならん」と内外メディアを萎縮させる効果もあつたのだらうと思っている。

崔太敏氏は、1974年に母親の陸英修氏を暗殺された朴氏に翌75年、慰めの手紙を送り、朴正熙、樺



韓国大統領府で大使への信任状を授与する朴槿恵大統領(左)
(11月18日/韓国大統領府提供)

恵親子に取り入った。

鄭ユンフェ氏は98年から朴氏の「秘書」を名乗り、朴氏の「秘線」として知られる存在となった。崔被告についてコラムで筆者は、鄭氏と離婚した女性として触れた。これが今回の疑惑の構図の一部をかすめる格好となった。

韓国での国政介入事件追及の流れの中では、当時の大統領府高官(今年8月死去)による内部検討結果とみられるメモが明らかになった。筆者を出国禁止とした8月7日には「(産経を)懲らしめてやる」「追跡し処断するよう情報収集、警察、国家情報院のチームを構成するように」とあり、産経新聞と筆者を狙い、朴政権が国家ぐるみの報復を指示していたことがうかがえる。

朴氏は任期満了前の辞任を表明したが、検察の聴取を拒否している。親朴槿恵系の世論が再集結するまで時間を稼ぐ構えだ。一方、セウォル号沈没当日の朴氏の所在をめぐる「空白の7時間」にもあらためて関心が集まる。検察、国会、メディアが駆け引きを激化させるなか、朴氏をめぐる韓国の動向から目が離せない。

かとう・たつや▼1991年入社 タ刊
フジ 社会部 ソウル支局長などを経
て 2014年10月から社会部編集委員

新・列島報告⑤ 大分県姫島村

賛否両論の村長選
61年ぶり 村民の評価は中谷 悠人
(大分合同新聞社)

投票率は88・13%で、1199票対512票の大差だった。投票率は高く見えるが、同村では珍しくない。村民は島出身で自民党副総裁を務めた故・西村英一氏を国政に押し上げ、投票に行くのは当たり前」との意識が今も生きているからだ。

■「島を二分」1955年の苦い経験

16回の無投票のうち、15回は昭夫氏と父の故・熊雄氏の親子リレーで記録。長期の無投票と多選の要因には、55年の選挙で島が二分された苦い経験と熊雄氏があるとされてきた。

55年選挙は投票率97・81%だった。一騎打ちとなり、105票差で決着。人間関係のしこりが残り、投票回避の風潮につながったという。その後、西村英一氏と二人三脚で



姫島村長選に立候補した藤本昭夫氏(右)と藤本敏和氏(大分合同新聞社提供)

島の礎を築いたのが熊雄氏だった。第三セクターのクルマエビ養殖会社の設立、全国的にも珍しい行政ワークシエリングの導入といった業績を残した。現職も流れを継承し、村民から一定の評価を得てきた。

村議会(定数8)の協調姿勢も指摘できる。質疑も一般質問もなく、執行部提案を原案通り可決して1日で閉会するのが通常。現職である昭夫氏の任期満了のたび、総意で再出馬を要請するのも慣例だ。政治的緊張関係がないことを背景に、昭夫氏自身も「多選は信任の積み重ね。選挙は小さな島を割る」と多選・無投票批判に否定的な見方を示してきた。

■選挙戦は民主主義のルール

一方、新人の藤本敏和氏は進学で島を離れ、NHKで番組づくりなどに携わってきた。2年前にUターン後、村職員から不満を聞いたり、村教育委員として現職の政治に触れるなどして「村長の力が大きすぎる。職員や村民の意見が届いていない」と感じたという。数人の支持者を得て告示2週間前、多選批判を前面に打ち出して出馬を表明した。

届け出までには村議会議長ら村内の有力者が「2年後に副村長に就き、4年後に無投票で現職と交代し

ては」などと複数回、辞退を働き掛けたものの、「選挙戦は民主主義のルール。不和をもたらすものではなく、島をよりよくするためのもの」などとして拒否。あくまで選挙戦での首長交代を目標にしていた。61年ぶりの選挙戦は出身者ながら島の論理に染まっていなかった。帰省で実現したのかもしれない。喝采を送る人がいた半面、「新人はまだ島をわかっていない」との声も多く聞かれた。

■懸念された「しこり」は？

選挙後、現職は「小さな自治体での選挙戦はよくないとの意を強くした。住民の分断を生むからだ。今後村長選は無投票の形にもっていきたい」と語り、陣営関係者からも「意義はなかった」との声が相次いだ。

一方、新人陣営は「選挙戦が起こり得ると示されたことで、現職の気も引き締まるはず」と話す。村民の評価はさまざま。島にとって今回の選挙がどんな意味を持つのか、わかるのはこれからだろう。選挙前に懸念された「しこり」も今のところ、表面には出ていない。

なかに・ゆうひと▼2010年入社
本社運動部を経て 13年から地域報道
部国東支局長

被災地通信⑥0 鳥取県倉吉市

住宅被害1万3000棟超え
職人不足で進まぬ修繕

勝部 浩文（山陰中央新報社）

鳥取県中部で最大震度6弱の揺れを観測した地震から、11月21日で1カ月を迎えた。県によると、住宅被害（11月20日現在）は1万3335棟。被災した家屋のほとんどは修繕や建て替えが進んでおらず、生活再建の道のりは依然として険しい。

県内の被害状況は、住宅関係が全壊15棟▽半壊108棟▽一部損壊1万3212棟。一部損壊は2000年に発生した鳥取県西部地震（最大震度6強）の1万4134棟に迫る。地域別では、人口約4万8千人と県中部で最も多い倉吉市が9205棟と大半を占め、北栄町が1588棟

と続く。死者は出ていない。

倉吉市と北栄、湯梨浜、三朝、琴浦の4町からなる県中部を中心に、地域経済を支える観光業と農業にも大きな影響が出た。三朝温泉など宿泊施設の予約キャンセルは延べ2万8967泊分、農林水産関係の被害はナシの落下などで13億400万円に上った（ともに同15日現在）。

降雪シーズンに屋根被害の対応進まず

最大で3千人いた避難者は18人（同20日現在）に減った。ただ、被災者の生活再建は道半ば。大きな課題は被災住宅の修繕で、多くは損壊した屋根などをブルーシートで応急処置しただけにとどまっている。

一因は当初、被災市町の職員が不足し、生活再建支援金の受給などに必要な罹災証明書の交付手続きが申請に追いつかなかったことにある。19府県などから延べ250人の職員派遣を受け、ここきて認定の1次調査が終了。過去の地震で交付の遅れが復興の妨げになった経験が生かされた。県は住宅再建に支援金を出す独自制度について、一部損壊の住宅に対象を広げる措置も取った。しかし、別の問題が横たわる。左官など、瓦をふく職人が不足し、一部損壊の多くを占める屋根被害への

対応が進まない。県中部の職人は高齢化などでピーク時の半分に減り、現在は40人ほど。どの工務店も修繕は施工まで2、3年待ちという。被災者は大きな不安を抱えたまま、降雪シーズンを迎えることになる。

地震で露呈した空き家の現状と課題

空き家問題の深刻さもあらためて痛感した。北栄町では地震発生から6日後、道路沿いの空き家が道路にせり出すように倒壊。地震で半壊し、町が県外に住む所有者と解体に向けて調整を始めたさなかだった。結局、町が行政代執行で撤去したが、約2週間、通行止めとなり、周辺の復旧作業に影響を及ぼした。



地震から6日後に全壊して1階部分がつぶれ、道路をふさいだ空き家（鳥取県北栄町／山陰中央新報社提供）

倉吉市の場合、空き家率は13年調査で14・8％。特に古い街並みの市中心部では、片付けが手つかずの空き家が点在し、まちの空洞化を物語った。損壊した空き家が放置されれば、急速に朽ち果てる危険性がある。被災市町は所有者の所在把握に努めているが、連絡が取れないケースが多い。被災地以外の自治体も平時から、空き家対策に本腰を入れておくべきだ。

人口減少と高齢化が進み、経済も疲弊した地方の震災復興は容易ではない。地震をきっかけに、他自治体への転出や、自営業の廃業を口にする被災者も少なくない。

地震発生から5日後、一部の報道機関の倉吉市内の避難所取材について、避難者の心情への配慮を欠くケースがあったとして、市に苦情が寄せられた。被災地の現状を伝える使命は果たさなければならぬが、それは「被災者本位」であることが大前提だ。あらためて、被災者としてしっかり向き合うことの大切さと難しさを肝に銘じ、少しでも被災者の力や希望となる記事を提供したいという思いを強くしている。

かつて・ひろぶみ▼2007年入社 報道部 経済部などを経て 2016年から地域報道部

マイBOOK マイPR

■日本の死に至る病 アベノミクスの罪と罰

倉重 篤郎（毎日新聞社専門編集委員）

アベノミクスの怪しさを撃つ アベノミクスって、そんなに大した経済政策なのだろうか。という素朴な疑問から、それを批判的にウオッチしている10人を選び、インタビュートものをまとめました。聞けば聞くほどに怪しい政策だと感じました。そもそも「三本の矢」が怪しい。実は異次元緩和という一本足打法であるにすぎません。成長至上主義、次世代過度依存、リスク過小評価も怪しく感じました。当クラブでの会見も参考にさせてもらいました。多謝。



河出書房新社 1728円

■女性記者が見る基地・沖縄

島 洋子（琉球新報社政治部長）

沖縄の2つの神話を問う 在日米軍専用施設の74%が集中する沖縄。東京で多くの人が言う、米軍基地を沖縄に置き続ける2つの理由は「基地経済」と「抑止力」だ。「沖縄は基地

で食っている」「米軍普天間飛行場は抑止力維持のために沖縄県内に移設しなければならない」。この2つの論が「神話ではない」ことをデータや米側の論調も含め紹介した。基地の街で生まれ育った私が、新聞記者として見つけてきた沖縄を知ってほしい。



高文研 1404円

■孤立する韓国、「核武装」に走る

鈴置 高史（日本経済新聞社編集委員）

韓国も核武装を着々と準備 北朝鮮の核・ミサイル開発が注目を浴びています。しかし、韓国も負けていません。いつでも核武装宣言できるよう、核ミサイル搭載可能な大型潜水艦を2020年に実戦配備します。水中発射型ミサイルも開発中です。核弾頭も韓国なら2年もあれば実用化できるといわれています。目的はもちろん北の核に対抗すること。「離米従中」で米韓関係が悪化し、米国の核の傘を期待しにくくなった結果でもあります。韓国外交をリアルタイムで分析する、このシリーズの9冊目です。



日経BP社 1512円

■日本人なら知っておきたい2020教育改革のキモ（フジテレビ「ホウドウキョク」編）

鈴木 款（フジテレビシニアコメンテーター）

教育問題を20人の論客が熱く語る フジテレビのインターネットニュースチャンネル「ホウドウキョク」で、現代の教育問題に切り込むトーク番組『教育のキモ』（司会・シニアコメンテーター・鈴木款＋女子アナウンサー）。2020年度から始まる教育改革やIT教育の最前線、いじめや貧困による学力格差問題、東京オリパラに向けた障がい者教育やスポーツの学び方まで、20人の論客が番組内で語りつくした内容が1冊の本に。教育は国家百年の計。親ならずとも必携の著。



扶桑社 1728円

■中国共産党 闇の中の決戦

中澤 克二（日本経済新聞社編集委員兼論説委員）

激しい権力をめぐる闘いの裏舞台 中国共産党トップに就いてから既に4年が過ぎようとしている習近平氏。権力の早期掌握に向けて苛烈な「反腐敗」運動を推し進め、政敵を次々に倒し、牢の中に送り込んできた。だが今、その手法が大きな壁に

突き当たっている。不穏な動きを見せる中国の体制内で何が起きているのか。習氏の任期切れは一般的には2022年。安倍晋三首相が自民党総裁任期の延長に動いたように、習氏もまたそれをめざすのか。闇の中で動く闘いの実相を探った。



日本経済新聞出版社 1728円

■EUは危機を超えられるか―統合と分裂の相克―岡部直明編著

岡部 直明（日本経済新聞出身）

たゆたえども沈まぬEUを冷静に分析 英国のEU離脱決定、反EU勢力の拡大、難民受け入れをめぐる亀裂などでEUが最大の危機に直面するなかで、第一線の研究者を結集してEUの行方を総合的に分析した。EU崩壊、ユーロ解体といった行き過ぎた悲観論に陥ることなく、EUの実態を冷静に分析し、グローバルアクターとしてのEUの存在意義を提示している。巨像であるEUを多面的に分析できたのは明治大学国際総合研究所・EU研究会での研究成果である。



NTT出版 2592円

戦場からメリークリスマス ——チャウシエスク政権崩壊——

伊藤 千尋



いとう・ちひろ

1949年山口県生まれ 74年朝日新聞入社 サンパウロ バルセロナ ロサンゼルス各支局長を歴任 2014年退社 現在 国際問題のフリージャーナリスト NGO「コスタリカ平和の会」共同代表

主著に『燃える中南米』『反米大陸』『一人の声が世界を変えた』『キューバ—超大国を屈服させたラテンの魂!』『観光コースでないベトナム』『今こそ問われる市民意識』『地球を活かす—市民が創る自然エネルギー』『闘う新聞—ハンギョレの12年』など

もう四半世紀を過ぎたが、市街戦の銃撃音、街を走る戦車の轟音を鮮明に覚えている。1989年12月の東欧ルーマニア。チャウシエスク政権が崩壊したというラジオのニュースを聞いたのは、朝日新聞「AERA」の記者として取材中のチエコだ。すぐに国際列車に乗り9時間後、ルーマニア国境に到着した。

ハンガリーからルーマニアに入国するときは身構えた。国境が閉鎖され、列車で入国する外国人は強制的に降ろされたというニュースを聞いたばかりだ。しかも観光ビザは用意したが、報道ビザはない。パスポートやカメラ、大量のフィルムを見れば報道関係であることは一目瞭然だ。ここは方便で乗り切るしかない。係官に「旅行会社の社員で観光がてら撮影する旅だ」と偽ると「社長

か」と聞かれた。平社員といえ拒否される雰囲気だ。かといって社長という年でもない。「副社長だ」と答えたらスタンプを押してくれた。

国境を越えたのは午前1時だ。とたんに暖房が切れた。明け方、寒さで目を覚ますと窓の外は真っ白な凍土だ。駅のホームには兵士が立ち、自動小銃を水平に構えて引き金に指をかけている。だが、別の駅では向かいの列車の窓から若者が私に向けてVサインを突き出し「自由ルーマニア、永遠なれ」と声を上げた。

◆「一番激しい所へ」 銃撃戦の中へ飛び出す

首都に着いたのは出発から21時間半後の正午前だ。ホームには紙が散乱していた。ちぎられた『チャウシエスク演説集』だ。中年の男が開い

た本を靴で踏みつけ引き裂いた。チャウシエスクの肖像画も裂かれて、くずかごに転がっている。

あちこちに人の輪ができて議論している。私は学生時代にルーマニア語のゼミをとって通訳をしたこともある。輪に入って会話を聞いていると、内戦という言葉が耳にした。驚いて聞くと「知らないのか」と聞われた。駅の外に出ると、革命派と独裁派が市街戦を展開していた。

タン、タンという小銃の音、激しい機関銃、鈍い迫撃砲の発射音が響く。大変な事態に遭遇したことを悟った。車を探すと、駅前に車を停めていた大学の教授が提供してくれていた。どこに行きたいか問われ「銃撃戦が一番激しい所へ」と答えた。

5分もせずに目の前の横道から戦車が2両出てきた。銃座の兵士は革

命派の印の三色旗の腕章をしている。私に気づくと、Vサインした。話を聞こうと車を降りて走ると、そばのビル窓から銃撃された。独裁派の兵士だ。足元を銃弾が跳ねる。車の陰に滑り込んだ。戦車がビルに発砲し、目の前で戦闘が始まった。

中南米で内戦の最前線は何度も経験したが、市街戦は初めてだ。石造りの建物に跳ねた銃弾が四方八方から飛んでくる。そんな危険な街路に群衆がいて、殺気立った顔で私の車を止め「トランクを開けろ」と叫んだ。独裁派の兵士に銃弾を運ぶ車を検問していると言う。革命のため市民が自発的に奮い立ったのだ。

大通りの向こうで独裁派の兵士が市民を銃撃していた。行けば30行ほどの原稿になりそうだ。だが、通りの両側で撃ち合っており、銃弾が飛



市街戦の街に繰り出した戦車と焼け焦げた建物 (1989年12月/筆者撮影)

び交う。弾に当たって死ぬかと思うと一歩が踏み出せない。頭は向こうに行きたいが、足はすくんだ。

そのときだ。傍らにいたルーミア人の若者が「ブシドー」と叫んだ。街を走り回る私に「この革命が世界に知られるよう手伝いたい」と助手になってくれた予備校生だ。黒澤映画で武士道を知ったという。こう言われると日本の男としてためらってられない。運を天に任せて走り出した。耳元でヒュンヒュン音がした。泊まったホテルの壁は銃痕だらけ、レストランは砲撃で黒焦げだ。国際電話は通じない。テレックスで原稿を送ろうとしたが、配列がフランス語形式で文字を一つ一つ探すのがもどかしい。キーをたたくうちに窓の外から機関銃の銃撃を受けた。頭の上の窓ガラスが飛び散る。逃げようとする係の女性に「これを東

京に送ってから逃げてくれ」と叫ぶ。腹を据え、原稿のあとに「戦場からメリークリスマス。まさかの時は妻子を頼む」と行政電を加えた。

午前4時に枕元の電話が鳴った。日本大使館からだ。「独裁派が勢いを盛り返して外国人は皆殺しにされる情勢となった。大使館員と邦人は国外に退去する。あなたも大使館に来てくれ」と言う。私はせっかく入ったのだから留まると言った。

その館員は説得のためにわざわざホテルに来てくれた。情報の出所はアメリカ大使館だという。つまり確度が高い。米海兵隊が先導して米国と日本の車列を作り、全速力で隣のブルガリアに走るという。海兵隊が逃げるという戦慄した。

そのとき、私の1日後に入国した若い放送局記者が「こんな所で死にたくない。私は逃げます」と言った。

私の脳は反発した。「こんな所」というが、ここは世界が注目する地で今は歴史の転換点だ。記者として一生に一度遭遇するかどうかの機会である。

残るか逃げるかを即座に決めなければならぬ状況にさらされた。そのとき頭に浮かんだのはジャーナリ

ズム魂というきれいなことではない。自分は何者か、という自身への問いだ。ここで逃げたら命は助かっても今後はジャーナリストとして胸を張って生きてはいけなと思った。死よりも、その方が怖かった。「僕は残ります」という言葉が口をついた。

しかし、一人になると心底怖くなった。これで私も死ぬかもしれないと本気で思った。左足が膝元からガクガク震えた。両手で押さえても長い間、止まらなかった。

翌日、ホテルのロビーに置かれたテレビは一日中、チャウシエスクが簡易裁判で銃殺された映像を流した。国際世論は独裁者に正式な裁判をすべきだと言ったが、そんな悠長な情勢ではなかった。独裁者を処刑したから独裁派は守るものを失って瓦解したのだ。処刑がなかったら多くの市民の命が失われただろう。私を含めて。現実の混乱の中にと、現場を知らない論評がしらしらしい。

◆独裁化した背景探る 同じことは今の世も?

革命が勝利に終わったあと、疑問に思っていたことを聞いて回った。かつて米中接近の橋渡しをするなど開明派と言われたチャウシエスクがなぜ独裁者になったのか、だ。

きっかけは「プラハの春」のチェコにソ連が侵攻したことだった。チャウシエスクは、チェコの次はルーミアニアが標的になると警戒した。宮廷革命を起こさせないためソ連派の幹部を切った。周囲にはイエスマンしか残らなくなり、チャウシエスクの言動全てが称賛されるようになって急速に独裁化したという。

よかれと思ってしたために独裁化を招き、結局はわが身も国も滅ぼしてしまふ。今もありそう。隣の中国では腐敗をただ大義の下に権力を集中した結果、為政者は独裁への道をたどっているように見える。わが国のリーダーは大義さえなく、自ら党総裁の3選を決めた。

「ブシドー」と叫んだクリスチャン君に身の上を聞くと、彼は「そういえば僕は病人だった」と笑い出した。大病院で精密検査するために地方から出てきたのだった。彼に謝礼の金を渡そうとしたが受け取らない。腕時計をはずして記念にしてもらった。今も持っているだろうか。この稿を書くにあたって行政電が伝わったのか、27年目にして初めて妻に聞いた。社はちゃんと伝えてくれていた。「戦場からメリークリスマス」という文面を聞いて、生きて帰ると確信した」と妻は言った。

私が会ったあの人

戦後体験から自社連立へ

村山政権を支えた野坂浩賢氏

川上 高志（共同通信社）

1996年1月5日、村山富市首相が「正月の青空を見ながら決めた」と辞任を表明した時、官房長官の野坂浩賢氏は「限界でしたかなあ」と漏らした。政権を懸命に支え、当日の朝まで説得を尽くした氏の「限界」とは、自社さ連立政権だけではなく、旧世代の区切りの言葉だったのだと思う。

野坂氏との付き合いは社会党担当になった92年秋からだ。村山国対委員長の下で衆院予算委員会の理事を務めていた。脳溢血の後遺症から右足を引きずりながら国会内を歩き回る。思えば「自社なれ合い」と言われた国対政治の最前線だ。裏取引もあったのだろう。とぼけながら記者の質問をかわす、ひょうひょうとした野坂氏は憎めない取材対象だった。

深く話をするようになったのは村山政権の発足後だった。細川政

権から羽田政権まで、連立への参加から離脱へと揺れ続けた社会党の中で、村山氏を委員長に押し上げ、自民党と水面下の接触を続け、社会党内の羽田連立復帰派を退けて自社さ政権をまとめ上げた。

野坂氏は政局の節目に「どうしたらええですかねえ」と丁寧に尋ねてきた。若輩の意見など参考にもしていなかっただろう。こちらの反応を確かめていただけたと思う。自らは腰を低くして村山政権を支える姿勢に徹していた。

その野坂氏から鮮明な印象を受けたのが自民党を離党し当時、新生党代表幹事だった小沢一郎氏への拒絶感だ。「わしらとは時代が違う。一方的で話もできん」と語った。

その一方で、同世代の自民党議員には親近感を隠さなかった。例えば野中広務元官房長官。野坂氏から若い時代の思い出話を聞き、野中氏と

付き合ってた思い至る。共通するのは敗戦直後の青年団活動である。野坂氏は敗戦の1年前に陸軍に入り、戦後は地元・鳥取で青年団活動に携わり、政治の道へ進む。野中氏も敗戦で京都に帰り、青年団活動からスタートしている。

さらに言えば竹下登元首相は島根で青年団活動に、村山氏は大分で漁村青年運動に携わっている。野坂、竹下、村山の3氏は1924年、野中氏は1年後の生まれだ。後に社会党と自民党に分かれるが、戦後の復興に若き志を抱き、地元活動に情熱を注いだ体験を共有していた。

社会党の中間派に属した野坂氏から理論を聞かされた記憶はない。あくまでも地域活動に根差す現実政治家だった。その根底には戦後再出発

の礎となった現憲法への強い思いがあったとみる。

これに対して小沢氏は当時、自衛隊の海外派遣などを巡り憲法体系の変革に挑んでいた。小沢氏への拒絶感は憲法を巡る思い入れから来るものもあったのだろう。

野坂氏が繰り返し返したのが「戦後の積み残しの課題をやらんといかん」という言葉だ。村山政権は戦後50年の首相談話や被爆者援護法制定、水俣病未認定患者救済などの実績を残した。その一方で自衛隊合憲や日米安保堅持など社会党の基本政策を転換し、党衰退への道を開いたとも言える。

冷戦終焉という転換期に村山政権は旧世代が放った最後の煌めきだったのではないか。そう考えれば「55年体制」を超えて手を結んだ自社両党の連立は、必然の産物であり、同時に限界を内に抱えていた。時代の変わり目の厳しい現実を、野坂氏は身を持って教えてくれた存在だった。

（かわかみ・たかし 論説副委員長）

次号は井芹浩文さん（共同通信出身）にバトンが渡ります。



記者会見する野坂浩賢官房長官（1995年11月16日／首相官邸／共同通信社提供）

私が会った
あの人

トランププタワ―でインタビュ―した 「未来の米国大統領」

川端 久雄（朝日新聞出身）

「名画をやっと手に入れた満足感があります」

ニューヨークの不動産王ドナルド・トランプ氏は指をさした。トランプタワー26階にある社長室。窓越しに古城のようなプラザホテルが浮かぶ。ドル高修正を決めたプラザ合意の舞台にもなった。「名画」とは、このプラザホテルのことだ。

バブル景気最盛期の1980年代後半、日本マネーは米国で企業買収（M&A）や不動産投資に乱舞していた。プラザホテルも日本の建設会社などに買収されていた。トランプ氏はプラザホテルを、そこから買い戻したのだ。「毎日、見続けているうちに限りなく愛着が湧いてきてね」

その直後の88年4月、私はトランプ氏にインタビュ―し、朝日新聞の連載記事「ニューヨークよ」の1回目に掲載した（88年4月12日朝刊1面）。トランプ氏に会うまでの苦労は大変だった。ニューヨークへ来てから、彼が買い戻したという話を聞

き込み、取材依頼の手紙を出し続けた。やっと承諾が得られ、会えたのは1カ月にわたる取材を終えて、帰国の当日。午前中にインタビュ―し、空港に駆け込んだ。「名画」の言葉を引き出したときは、ぎりぎりまで粘った甲斐があったと喜びが込み上げてきた。彼も自分の愛国的行動を日本に伝えたかったのだろう。

当時から、大統領選をめざしているといわれていた。その点を質すと、「政治家になる気持ちは全くない」とかわした。

それから30年近くたち、トランプ氏のことも忘れかけたころ、共和党の大統領候補の指名争いで名前を聞くようになった。苦境の時代があり、ホテルは手放していた。「後にも先にもトランプ氏に取材した朝日の記者は、あなたしかいないようだ」と私も後輩記者から取材を受けるようになった。いずれ泡沫候補として消えていくだろうと思っていたら大統領候補になった。劣勢が伝えられる

中、大逆転劇が起きた。

そのお陰で、私も栄えある本欄に書くことになった。昔の業績でノーベル賞を頂いた心境です（笑）。

ただ、トランプ氏に会っていたことが何の誇りになるのかとの思いが強い。不動産王の正体が暴言王、猿蓑王だとわかるに及び、会っていたこと自体、恥ずかしくなった。人を差別し、社会を分断し、大衆を煽動しての当選。華麗なトランプ王朝一族を従えての勝利宣言。アカデミー賞の授賞式と見間違えた。

大統領になったら約変するといふ見方もあり、既に片鱗がうかがえる。現実路線として評価する声もあるが、共感できない。世界が悪くなる予感もする。もし、これがトランプ



「プラザホテルのオーナーになれて大変光栄」と語るトランプ氏。当時、41歳（菅谷誠氏撮影／朝日新聞社提供）

氏でなく、社会の公正さを訴えるバーニー・サンダース氏だったら、どんなに誇りをもって書いたことか。

新聞記者は人と会うのが仕事。社会部が長かったので、悪いことをする人たちが裏方として社会を支える人たちが多かった。政治家や経済人に会うこともあったが、その場合は不正を追及する場面だった。

元ニューヨーク特派員だった木村卓而さんが、当時の東京とニューヨークの状況を報告する取材班を結成し、そんな私をチームに加えてくれた。そこで出会った人物がたまたまトランプ氏だった。彼に会ったことを素直に喜べないので、タイトルから意識的にトランプ氏の名前は外した。「未来の米国大統領」に会っていたなら、新聞記者として少しは自慢しても許されるだろう。

個人的には共に1946年生まれ。こちらは縁あってM&Aの記事を今も書いている。そろそろ人生の終活をしようと思うころ、相手は長期の大統領選を勝ち抜いていく。そのバイタリティーには敬服する。

かくなるうえは、勝利宣言の最後で述べた「皆さんが誇れる大統領」になることを祈りたい。

（かわばた・ひさお 元朝日新聞論説委員）

「ガンマプレス50年写真集」
栗田格会員から寄贈

フランスの写真通信社ガンマプレスが創立50年を記念して写真集を刊行。東京支局長の栗田格会員からご寄贈いただきました。



栗田さんが入社したのは1974年。高度成長時代の日本への関心は高く、当クラブの要人会見も注目されました。「最近パリから日本の政治家のリクエストがくるのは年1、2回。寂しい」と栗田さん。

写真集にはベトナム戦争、中東・アフリカの紛争地、各国のリーダー、ジョン・レノンとオノ・ヨーコ夫妻、ファッション…この50年の「世界」が凝縮されています。日本人カメラマンはただ1人。「KAKU KURITA」のクレジットで、武道館で行われる子どもたちの「書き初め」などが収録されています。ラウンジでご覧いただけますので、受付にお申し出ください。

写真集(仏語、価格：59ユーロ)はネットで入手できます。売り上げは「国境なき記者団」に寄付されるそうです。

情報発信

■第5回日本医学ジャーナリスト協会賞授賞式・記念シンポジウム

質の高い医学・医療ジャーナリズムの定着を狙いとして2012年に創設された。受賞者は次のとおり。

▷大賞＝書籍部門：『認知症 医療の限界、ケアの可能性』上野秀樹さん(精神科医・千葉大特任准教授)／映像部門：NHK ETV特集『それはホロコーストの“リハーサル”だった～障害者虐殺70年目の真実』村井晶子さん(NHK文化・福祉番組部ディレクター)／新聞・雑誌部門：『語り継ぐハンセン病 瀬戸内3園から』阿部光希さん、平田桂三さん(山陽新聞社編集局報道部)▷優秀賞＝書籍部門：『破綻からの奇蹟～いま夕張市民から学ぶこと～』森田洋之さん(南日本ヘルスリサーチラボ代表)／映像部門：『鳥の命を見つめて～豊島の看護師・うたさん』武田博志さん(山陽放送報道部ディレクター)／新聞・雑誌部門：『脳脊髄液減少症を追った11年間の報道』渡辺暖さん(毎日新聞社社会部)(11.7 会場)

■浅野史郎氏、野澤和弘氏 合同出版記念会

元宮城県知事の浅野史郎氏が『輝くいのちの伴走者 障害福祉の先達との対話』を、毎日新聞社論説委員の野澤和弘氏が『障害者のリアル×東大生のリアル』(同氏編著、「障害者のリアルに迫る」東大ゼミ著)を出版したことを祝う記念会が合同で行われた。

同会の呼びかけ人代表で元厚労事務次官の村

新しいOB会員

すぎやまわ いちろう
杉山和一郎



1973年毎日新聞入社。英文毎日局局長、毎日広告社常務取締役東京代表。現在、クレオ事務所合同会社代表取締役。

主に在日外国企業のビジネス活動の手助けのための、コンサルタント業を展開中です。

■会議報告

●第224回施設運営委員会(11.8 シルバールーム)

9～10月のアラスカ、貸室の利用状況と売り上げを事務局から報告した後、年末年始の閉室期間(12.29～1.3)を決めた。リニューアル作業中のウェブサイトの施設利用関係ページを中心に委員から意見を聞いた。

出席 西淵委員長、海保、関、堅田、根本、林、佐塚、富田、羽原の各委員。

●第468回企画委員会(11.8 会場)

「2017年経済見通し」について担当委員が報告したほか、今後のゲスト候補などを検討した。「2017年予想アンケート」の出題割り当てを決め、次回の委員会で設問を作成することにした。

出席 西村委員長、坪井、服部、倉重、福本、橋本、鶴原、脇、実、水野、宮田、榊原、杉田、川上、軽部、石川、山本、瀬口、傍示、島田、竹田、川戸、播摩、和田、袴田、梶本の各委員。

●第378回会報委員会(11.9 大会議室)

12月号と1月号の編集を協議した後、リニューアル作業中のウェブサイトを公開し、委員から意見を聞いた。

出席 飯塚委員長、稲沢、大辻、鈴木、渡辺、吉澤、長崎、藤井、藤澤の各委員。

●第471回会員資格委員会(書面)

12月1日付入退会を審議し、理事会に答申した。

木厚子氏、元高知県知事の橋本大二郎氏、アナウンサーの生島ヒロシ氏はじめ、約100人が出席した。(11.18 10階ホール)

■国際シンポジウム「激動する東アジア経済—日台の進むべき道」

主催：アジア調査会

李淳・中華経済研究院副執行長、伊藤信悟・みずほ総合研究所中国室長、高寛・元台湾三井物産董事長、坂東賢治・毎日新聞社論説室専門編集委員がパネリストを務め、今後、日本と台湾がとるべき経済連携戦略などを討論した。(11.24 10階ホール)

■放送人政治懇話会

テレビ・ラジオ局の現役・OBらによる定例の勉強会。斉藤鉄夫・公明党選対委員長(11.2)、小池晃・共産党書記局長(11.9)、蓮舫・民進党代表(11.30)を招いた。

レストラン*価格は全て税込みです

予約電話 和食 3503-2723 洋食 3503-2766・2731

和食 師走懐石(12/28まで)

先付：ふぐ皮煮ごり、アスパラサーモン巻
お椀：鶏真丈 造り：三点盛り 焼物：鰯照り焼き
煮物：里芋、栗麩オランダ煮 揚げ物：ふぐ唐揚げ
食事：稲庭うどん 水菓子：季節の果物
グラス冷酒付き(5,400円) (板長：大井由光)

洋食 おすすめコース(12/28まで)

牡蠣フライサラダ仕立て、コンソメまたはオースターチャウダー、鹿背肉のソテー・赤ワインソース、チョコレートナッツサンデー、パン、コーヒープッキ(3,996円)。ランチ、ディナー(土曜日はランチのみ9階レストラン)ともにご利用いただけます。(シェフ：黒須修一)

ふぐコースのご案内

好評のふぐコースを来年2月3日(金)まで提供しています。刺身に唐揚げ、鍋の後は締め雑炊でふぐを堪能してください。お一人5,940円で、お二人からお受けします。必ずご予約をお願いします(03-3503-2723)。

忘年会、新年会はクラブで 1月30日(月)まで

忘・新年会、社内の集まりにクラブの貸室をご利用ください。お一人3,240円のパーティープラン(2時間の飲み放題付きはプラス1,404円)をご用意します。ご予約は03-3503-2724へ。

年末年始 閉室のお知らせ

レストラン、ラウンジの年内営業は12月28日(水)までです。事務局も12月29日(木)から1月3日(火)まで閉室いたします。新年は1月4日(水)から平常通りオープンします。

HP更新情報 <http://www.jnpc.or.jp/>

● 会見詳録 会見の全文文字記録版

● 朴柱奉・バドミントン日本代表監督(2016.11.7)

今後の行事予定(12/5現在)

15㊥	13:30～15:00 9階会見場 研究会「北朝鮮の核とミサイル」④ 李燦雨(イ・チャンウ)帝京大学講師
16㊤	14:00～15:00 10階ホール シリーズ企画「チェンジ・メーカーズに聞く」⑬ 四家千佳史コマツ執行役員
2017年 1月 16㊥	18:00～19:30 10階ホール 新年互礼会員懇親会(会費：3000円)

日本記者クラブ賞 同特別賞候補の推薦を

すでにご案内のとおり、2017年度日本記者クラブ賞と特別賞候補の推薦を受け付けています。締め切りは来年1月31日(火)です。両賞とも、所定の推薦書(クラブのウェブサイトからダウンロードできます)で、推薦理由(2000字以内)と参考資料を添えて提出願います。

詳細は事務局の本庄(03-3503-2754)へお問い合わせください。

■日本記者クラブ賞

取材、報道、評論活動などを通じてジャーナリストとして顕著な業績を挙げ、ジャーナリズムの信用と権威を高めた個人を顕彰します。会員または法人会員社に属する方々が対象です。クラブ会員であれば推薦できます。

■日本記者クラブ賞特別賞

原則として会員・会員社以外のジャーナリズム活動を顕彰します。ただし、会員社の取材班・番組班などチームとしての業績も対象となります。クラブ会員だけでなく、日本新聞協会および日本民間放送連盟の加盟社に属する方であれば、どなたでも推薦できます。

賛助会員の皆さんへ 会費の寄付控除が受けられます

賛助会員の皆さんの会費は、「所得税額の特別控除」の対象になっています。法人賛助会員会費は損金算入が可能で、特別賛助会員会費は確定申告によって所得税、都民税の控除が受けられます。申告の際は「税額控除に係る証明書」が必要です。クラブのウェブサイトからダウンロードしてください。また、1年間の領収書が必要な方は経理担当(03-3503-2727)までお申し出ください。

貸室料一部変更のお知らせ

業務システムの更新に伴い、来年1月から一部の貸室料の宴会割引料金を100円前後、微調整させていただきます。

税抜きの宴会割引料金は、通常料金の15%引きの数字を基に一の位を切り捨てていましたが、新システムではプログラムをシンプルにするため、一律15%引きに変更します。ご理解いただきますようお願いいたします。

なお、宴会割引はお一人3,000円以上の飲食を伴う会合に適用しています。

<法人会員代表変更>

東奥日報社

佐藤秀樹取締役東京支社長(旧・蝦名克律氏)

<訃報> 加田純一会員(読売新聞出身、94歳)が11月15日死去されました。ご冥福をお祈りいたします。

クラブの電話 ダイヤルイン

- 和食レストラン(9階)..... ☎3503-2723 ●会員事務..... ☎3503-2727
- 洋食レストラン(10階)..... ☎3503-2766 ●経 理..... ☎3503-2728
- 貸室予約、宴会打ち合わせ..... ☎3503-2724 ●クラブ行事への申し込み..... ☎3503-2722
- 受 付..... ☎3503-2721 ●会見申し込みアドレス..... kaiken@jnpc.or.jp

会員現況

- 法人会員：134社 ●基本会員：746人 ●個人会員：1,290人
- 法人・個人賛助会員：64社・140人 ●特別賛助会員：101人
- 名誉・功労会員：12人 ●学生会員：151人 計：198社・2,440人

会報委員会

- 委員長＝飯塚 浩彦
- 委 員＝稲沢 裕子 井上 洋一 大辻 一晃
- 大寺 廣幸 鈴木 仁 長崎 和夫
- 藤井 良広 藤澤 秀敏 吉澤 正一
- 渡辺 大祐

(事務局：長谷川和子 村田 茜)

☎03-3503-2752 FAX 03-3503-7271

撮影：越田 省吾 (朝日新聞東京本社映像報道部)



衆院TPP特別委で、採決に反対する野党議員らが詰め寄る委員長席を見る山本有二農水相(左奥)
=11月4日、国会内

ちやぶ台返し、の時代

ちやぶ台は、昭和の初めに普及し、一家団欒のシンボルだったが、高度成長期を境に徐々にダイニングテーブルに取って代わられた。なじみが薄いはずのLDK育ちの世代にも「ちやぶ台返し」が通じるのは、アニメ「巨人の星」シリーズの星一徹のおかげかもしれない。

「ぐちゃぐちゃになってしまふ残念な結果」と与党の国会対策の責任者が漏らした。衆院特別委の採決強行は、現場主導のちやぶ台返しだったようだ。翌週に、特大級のちやぶ台返しが控えていた。ヒラリー・クリントンなら、TPP(環太平洋経済連携協定)も脈があったが、確信犯的な拒絶派のドナルド・トランプが勝ってしまった。

地球温暖化阻止をめざすパリ協定も微妙な状況だが、論者によっては、もっと大きな「ちやぶ台」を挙げる。グローバリゼーションとか、米国主導の国際秩序とか、政治的に言って良いこと悪いことのポリテイカル・コレクトネスとか。勝敗が決した11月9日を、27年前の同じ日の「ベルリンの壁崩壊」以来の歴史の転換点という人もいる。

思えば2016年は、ちやぶ台返しの日だった。内では、安倍晋三首相が唐突に消費税増税の先送りを発表した。小池百合子東京都知事の豊洲市場と五輪施設見直しの試みも、入るかもしれない。

外では、英国のBREXIT投票があり、真打ちが「トランプ大統領」。これには、激戦州で票の数え直しというミニちやぶ台のおまけがついた。

(土谷 英夫)